
オーダーメイド風変伝 織田冥土

zens

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーダーメイド風変伝 織田冥土

【Nコード】

N8526G

【作者名】

zens

【あらすじ】

時は、戦国。南蛮から伝わりし、メイドとそれを受け入れた信長のお話。尚、この物語は全て架空のものであり、史実は含まれておりません。そもそもこの時代にメイドいません。

時は、元龜2年。

西暦に直すならば、1571年。

南蛮からの文化、そして信長の優れた善政によって、清州は繁栄の一途をたどっていた。

特に、清州に来た人々を驚かせたのは、礼儀正しい女性たちであった。

彼女たちは、漆黒の衣装を身にまとい、妙な布を頭に乗せ、そして誰に対しても優雅に流れるように挨拶をしたと後に、清州へ行った旅人は語っている。

その書には、彼女たちのことを冥土と記してあったと言う。

「殿！ 冥土の人氣は素晴らしいものです。民たちの間では、近頃冥土喫茶なる、バレン発祥の言葉が流行っているようです」
「ふむ、そうか。よいよい」

家来の報告に信長は満足げに1つ頷いた。
彼は、珍しいものを好み、新たな文化に対しても興味を抱いていた。特に、冥土と呼ばれる女性たちを高く評価していた。

「では、信長様。さつそく視察と参りましょう。民あつての清州。我々は民を知るべきです」

「左様にござる。我らは視察に参るのだ。けして、おなごを見たいからではない」

「うむ。それは是非見に行かねばなるまい。勝家、一益、行くぞつ。光秀、後は任せる！」

「ははっ」

「……またですか。あまり遅くならないでくださいよー」

と、光秀から忠告を受けた3人は意気揚々と街へと繰り出した。

「「「いらつしゃいませ！」」」

店に入ると美しい女性の挨拶が3人に向かって飛んでくる。勝家や一益は、思わず頬が緩む。しかし、

「……………」

信長は、店内の女性を見るや否や露骨に不機嫌になってしまった。肩は震え、齒を食いしばり怒りを押し殺そうとしている。

そのまま店の外へと出てしまい、慌てて追って来た勝家と一益に尋ねた。

「あの店は、誰が営業している！」

「はっ、延暦寺の坊主にございます」

この店の営業を許可した勝家が即座に返答する。

「あの糞坊主どもが！ メイドを侮辱するとは許さんっ！ 奴らの醜いスカートを全て焼き払え！！ この店はロングスカートに切り替えじゃ！」

こうして、延暦寺の焼き打ちがとばっちりで決定された。
信長の頭の中では、冥土Ⅱロングスカートだったのだ。

延暦寺の麓に着くまで、信長は頭に血が上りに上っていた。
付近には、数人清州と同じように冥土がいたのだが、どれも皆短いスカートだったのだ。

当然、通達を出し、すぐにロングスカートに切り替えさせた。その時の女性の表情は何故か、皆ほっとしたもののばかりだった。

「油は用意したか。火はあるかっ」

今すぐに、燃やす気満々の信長。

しかし、光秀は近隣の冥土から聞いていたことがあった。それは、延暦寺には冥土養成学校なるものがあるというのだ。
彼女たちまで危険に晒すわけにはいかない。

光秀は、何とかしようと信長に進言する。

「の、信長様。恐れながら、そのようなことをされても、スカートを燃やせば、更に短くなります」

「ならば、ひん剥いてしまえ!!」

「ひん剥いてしまえば、それはただのおなご。冥土に非ず」

きつぱりと光秀が言うと、さすがの信長も目を丸くする。

光秀もまた冥土好きだったのだ。所謂、むつつりなので、表に出す事はないが。

ほんの少しだけ冷静さを取り戻した信長は光秀に問う。

「ならば、わしにどうしろと言うのだ」

「あの短きスカートがいかに恥ずかしいかという事を思い知らせる必要がありますな」

それは、まるで女性を知った様な口ぶりだが、彼には妻以外に女性関係は無い。

つまり、妻＝女性で物を考えているのだ。というか妻が全て最初の相手である。手を繋ぐのも接吻も夜伽も……。

しかし、信長がそれを知る由もない。知りたくもないだろう。

「どうするというのだ」

「ここは、光秀めにお任せください。必ずや、信長様の満足のいく結果をご覧にいれましょう」

「……ならば、任せるぞ」

信長は、自信たっぷりの光秀が女性に詳しいと錯覚していた。

「ははっ」

ただ、現実には光秀はそうではないし、また光秀が信長の心情を知る術はなかった。

長い石段を登りきった。

何故、このような所に寺を建立したのか。

修行のためとはいえ、難儀だと思いつつも光秀はきびきびと指令を出す。

「では、皆に告ぐ。槍ではなく、団扇を持つのだ」

兵は、首を傾げながらも言われたとおり、団扇を持つ。

今回最前線に連れてきたのは、戦経験の薄い女性ばかり。そのために、緊張感に欠けるものが多かった。

兵士ががやがやと煩いものだから、寺からは冥土たちが何事かと出てくる。

すると、それを待っていたかのように光秀は号令をかけた。

「きゃああっ!?!」

「や、やめてください!」

「いやああっ」

短いスカートが風に煽られ、冥土たちがあられもない姿を晒す。しばらくの間、風は吹き続け、彼女たちの意思とは関係なく辱められていく。

皆が羞恥に染まり、立てなくなった頃合いを見計らい、止めの合図を出す。

命令を実行した兵がとても冷めた目で光秀を見ているが、それをする余裕は彼にはない。

「よいか。短いスカートはこういう風になるのだ。分かったなら、これからは膝上のスカートなど履かぬことだ」

兵たちは光秀が罵倒される、誰しもがそう考えた。

しかし、その予想に反し冥土たちは口々に感謝の言葉を述べた。曰く、僧侶に無理矢理短いスカートにするように強制されていたというのだ。

ちなみに、この場に男を連れて来なかったのは、色々と問題があるからだ。

ただ、唯一指揮する光秀だけはいえることができたので、役得と言わんばかりに脳内に冥土のスカートの下をしっかりと記憶することを忘れなかった。

一方、延暦寺の麓では……。

「……信長様。今、何をお捨てに？」

「煙草なるものじゃ、面白いものよ。口から煙が出る」

その瞬間、勝家の表情が凍りついた。

麓からもずっと全兵力で煽り続けているのだ。火は当然の如く、すぐに燃え広がった。

「皆、撤退じゃっ!!」

「なっ!?! 光秀ーっ。燃えておるぞ、はよう降りて来ーっ!」

結局、延暦寺は信長の火の不始末により炎上した。

その後、坊主たちは光秀の活躍によりどうにか生きて連行された。萌えていると聞こえたせいで判断が遅れてしまったが、誰1人死ななかつたのは、もはや奇跡に近い話だった。

こうして、冥土のスカートが長いものに統一されたのだった。

スカートの長さは、信仰の厚さ、と後にとある兵士の日記に書かれるのは、また別の話である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8526g/>

オーダーメイド風変伝 織田冥土

2011年6月5日13時29分発行